



三木 章

わがこころの作家

ある編集者の青春

三一書房

三木 章

わがこころの作家

ある編集者の青春

三一書房



三木 章 (みき あきら)

1923年3月31日群馬県甘楽町に生まれる。1937年講談社入社。1944年現役兵として中国旧満州へ。ソ連軍と戦闘し敗戦後3年余シベリア抑留。1949年1月講談社「キング」編集部勤務。「講談倶楽部」や「小説現代」編集長。その後文芸局長、専務取締役などを歴任し、1983年から6年間講談社フェーマススクールズ社長。現在は講談社顧問。

わがこころの作家

1989年9月30日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

著 者	三 木 章
装 幀	村 上 豊
発 行 者	晶 山 滋
印 刷 所	株 式 会 社 厚 徳 社
製 本 所	株 式 会 社 鈴 木 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都文京区本郷2-11-3
電 話 03 (812) 3 1 3 1 ~ 5 番
振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番
郵便番号 1 1 3

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

© 1989年

ISBN 4-380-89241-7

わがこころの作家―ある編集者の青春―

編集者冥利につきてる——昭和五十八年八月五日・東京会館 9

多才で人間味あふれる人——編集者の道を教えてくれた川口松太郎氏 16

「怒り」と「やさしさ」と——純粹さ・誠実さ・正義感もつ舟橋聖一氏 23

信念つらぬいた作家——文壇のアウトサイダー石川達三氏 29

今でも思い出す「忠告」——文学放浪から人気作家になつた富田常雄氏 34

「浪漫」の清冽な息吹き——檀一雄氏と桐生の坂口安吾、南川潤氏 39

絵をよくした腕はプロ並——「肉体が人間である」と田村泰次郎氏 45

小説家と詩人の二つの顔——鄭重て30年前と変らない井上靖氏 50

共通の明治男の熱血漢——大衆文壇の雄・山手樹一郎氏と山岡莊八氏 59

確信をもつて文学賞辞退——「天衣無縫」純粹な山本周五郎氏 66

独創の社会派推理の大黒柱——見かけによらず大の甘党の松本清張氏 70

人間の業と性の重みの中——自己確立の道を見きわめる瀬戸内晴美氏 84

懇切な軽井沢からの手紙——昭和の女流・網野菊、円地文子、壺井栄氏 88

私のシベリア捕虜物語——共産党シンバの壺井栄氏とラーゲルを語る 95

畏敬しやまぬ素敵な人——中野重治氏夫妻の笑顔、野間賞の佐多稲子氏 101

サラリーマン小説の第一人者——26年の「住友」体験をベースに源氏鶏太氏 106

簡明率直剛気一徹な作家——気象庁34年、山岳・時代小説の新田次郎氏 111

イメージは『眠狂四郎』的——心は大きく懐はふかい柴田錬三郎氏 121

- 十年遠廻りをして作家に——『雁の寺』で人気作家になつた水上勉氏 126
 “外柔内剛”の津軽の人——新聞小説で一時代を画した石坂洋次郎氏 130
 鷹揚さと抱擁力のある人——自費で同人誌をつづけた丹羽文雄氏 137
 “和漢洋”の知識と教養——豪放で細心、爽快な毒舌家・今東光氏 144
 純粹でナイーブな作家——とかく誤解されやすかつた北原武夫氏 151
 心にしみる“抒情性”——“大人の”度量のあつた藤原審爾氏 155
 個性ある独自の作品世界——作家と大学教授を両立させた南條範夫氏 160
 すべての動物は人間と対等——世界にうろちる動物文学者・戸川幸夫氏 164
 文学青年はやつぱり“殿様”——推理小説ブームを創つた一人・有馬頼義氏 169
 漁師町によく馴染む人——画家から小説家になつた近藤啓太郎氏 181
 美事な硬軟つかいわけ——都会派の繊細な感性をもつ吉行淳之介氏 186
 三人三様の才能と技倆——海外の阿川弘之、遠藤周作、北杜夫氏 193
 文学の環境のなかで育つ——小説家の父の血をうけつゝ菊村到氏 204
 独特の“くの一”忍法ブーム——『戦中派不戦日記』にみる山田風太郎氏 208
 長篇に独自の文学世界——イエス、ノーが明快だつた有吉佐和子氏 213
 小気味よいスマートさ——精力的に海外取材にてかける曾野綾子氏 218
 眼をあらわれる新鮮さ——『感傷旅行』で芥川賞の田辺聖子氏 222
 経済小説を開拓した経済学者——読者に信頼され裏切らない城山三郎氏 227

時代小説に新しい型をつくる——映画と美味探求旺盛な池波正太郎氏 232

混血がテーマの『剣ヶ崎』——清冽でいつも正眼の構えの立原正秋氏 236

「ラブミー農場」で自給生活——人間の生と死を凝視していた深沢七郎氏 243

かつて焼跡闇市派の領袖——民放初期のCMソングで活躍の野坂昭如氏 250

作品に都会人的羞恥心——原稿の字も丁寧な心をこめる山口瞳氏 257

「失神」の流行語をつくる——純粹てきまじめだった川上宗薫氏 261

詩情あふれる戦争文学——長い戦場体験を書きつづける伊藤桂一氏 266

独自の史観独特の語り——話術でもまれにみる名手の司馬遼太郎氏 274

北満州から決死の逃避行——社会派から古代史に精力注ぐ黒岩重吾氏 279

道義観人生観も大陸的——悠久の歴史を語る中国人作家陳舜臣氏 283

入院中に推理を読みあさる——江戸川乱歩賞が欲しかつた笹沢左保氏 288

理論派で行動する作家——戦争告発に精魂をかたむける森村誠一氏 295

推理小説界に清新な風——「かがり火の会」に情熱注いだ仁木悦子氏 300

歌手の乱歩賞受賞で話題——シャンソンからミステリーの戸川昌子氏 304

吉川英治氏ただ一人の弟子——歴史・時代小説に健筆の杉本苑子氏 309

「歴史」を新鮮な現代感覚で——知性と教養と勉強の人・永井路子氏 313

なでしこの花のイメージ——つい軽口をたたきたくなる津村節子氏 318

知的で的確な人間描写——爽快なものを人にあたえる佐野洋氏 323

- ものを透視する人生の眼——忘草亭と号し俳句でも一家の結城昌治氏 330
- 理論と実践行動の作家——推理・歴史・伝記文学と幅広い三好徹氏 335
- ハードボイルドの先駆者——上海生まれで大陸的性格の生島治郎氏 339
- 人間は謙虚で庶民の典型——十余の職を転々、作家になった半村良氏 344
- 生きいきだ十四年間——昭和50年45歳で逝った好漢・梶山季之氏 349
- 旅は道づれ作家三人旅情——欧州の水上勉、三浦哲郎、大庭みな子氏 353
- 中国未解放地区への旅——興安嶺の戦友の骨をひろえる日はくるのか 362
- ペンで立つ決意し上京——科学者の眼と物語性で描く渡辺淳一氏 373
- 初対面時は純文学に固執——直木賞候補八回という記録の阿部牧郎氏 381
- 芯のある作品書ける新人——幾度かの人生の試練を経た宮尾登美子氏 386
- 全力投球するマルチ人間——小説修業18年で花ひらいた山口洋子氏 392
- 彗星のごとく逝った女流——廊を書きつづけて36歳の生涯・川野彰子氏 397
- 新鮮な才能の個性派作家——三様の森万紀子、丸川賀世子、岩橋邦枝氏 403
- “新人の発掘・育成”を柱に——小説現代新人賞受賞作品40人の記念出版 408
- 鮮烈な魅力の大型新人登場——『やっぱモスクワ愚連隊』の五木寛之氏 413
- 四十歳、再出発への大転換——中山あい子氏と小説現代新人賞作家群 426

装幀

村上
豊

わがこころの作家——ある編集者の青春

編集者冥利につきる

*昭和五十八年八月五日・東京会館

暑い日がつづいている。いつのころからか、夜は二十五度以上を熱帯夜といい、昼の三十度以上を真夏日というようになった。

昭和五十八年八月五日もそのような日であった。丸の内の東京会館にはいると、瞬間、顔そして首筋がひんやりとした。外気と何度くらい違うのだろうなどと思いながら、エレベーターを九階で降りて、ローズルームの脇の今晚の会の係の控え室へはいった。室内には三好徹、半村良、渡辺淳一の三氏が、講談社の文芸図書第二出版部長の杉山博君と、これからのパーティの打合せをしていた。

「ご苦労さまです。お世話になります」

私は、ちょっとテレながらソファの隅に坐った。

机の上の名簿のようなものを見ていた三好さんは、顔を私のほうに向け、少しきつい眼のまま、「三百五十、いや、四百人は間違いないね、ローズルームでよかった」といった。渡辺さんは柔らかい、人なつっこい笑顔を向けてニヤツとした。半村さんは杉山君と話していたが、頭をかきかきぴょこんと頭を下げた。半村さんはこれから会の司会進行役である。真白のスーツに白のワイシャツ、そしてダークグレーのネクタイで、いつもより細身に見える。

この会は私のためのものであった。

三木章君を慰労する会

この度、講談社の三木章君が、四十年におよぶ編集者生活に終止符をうつて、講談社フェーマス・スクールの社長に就任されました。つきましては、同君の労をねぎらい、今後の健闘を祝したいと思います。御多忙中のことと存じますが、どうかお誘い合せのうえ、御来会ください。

昭和五十八年七月十三日

世話人代表 川口松太郎

丹羽 文雄

井上 靖

松本 清張

記

日時 八月五日（金）

午後六時～八時

場所 丸の内・東京会館・九階ローズルーム

会費 一万円

会場準備の関係上、御都合のほどを同封葉書で七月二十五日までに、お知らせ下さいますようお願い申し上げます。

このような案内状が私の知っている作家、画家、出版関係の方々に発送されたのは七月中旬のことであった。

私は六月十三日で、長い講談社での編集者生活を終った。一週間後の二十日から虎ノ門にある会社

にかよって、新しい仕事についていた。

私が会のことを知らされたのは、六月も末のことだった。それも世話人から係の人のこと、日時、場所、ただただ驚くばかりで、「申し訳ない」という気持ちでいっぱいになった。しかし、恥かしさと暗れがましい気分が脳裡をかすめたことも事実であった。係は三好、半村、渡辺三氏のほか、佐野洋生、島治郎、五木寛之といった作家の人たちで、それぞれ裏方をやってくれるという。場所が東京会館のローズルームときいて、私にはあの広い部屋での、野間文芸賞や芥川賞・直木賞のパーティの光景が想い出された。

これらの賞はローズルームで祝賀会が行われているからである。

会の始まるまでのしばらくの間、世話人代表の川口松太郎さんをはじめ、丹羽、井上、松本といった方々と、初めて会った日のことを焦点の定まらないまま、想い出していた。私は、二、三日前、今晚の挨拶のために紙は薄茶色になり、ところどころシミの出ている古い手帖の頁を、丁寧にあげて調べてみた。

昭和二十四年の手帖には、四月七日、川口松太郎とあり、そのあと括弧して大映江村秘書とある。ほかには何も書いてない。鉛筆の細い字で一行だけである。あとは三十四年前の記憶をたぐりよせて、眼の前と頭の中に描き出さなければならない。それもできるだけ鮮明にである。そのころの私は「キング」編集部駆け出し編集者で、この日は中里編集長（作家新井素子さんの祖父）に川口さん担当を命ぜられて、編集長について挨拶に行った。川口さんは大映専務をしていた。

私の手帖もやがてはこまかく書かれてはいるが、復員して編集者になった四、五年間はこんな調子で、これには私なりの理由があった。

十八歳で短歌「アララギ」の会員になった私は、斎藤茂吉そして土屋文明先生に添削をしていただ

いた。少年期青年期は日記を欠かさずつける習慣があった。兵隊に行くときにはポケット日記を三冊と岩波新書の『萬葉秀歌（上・下）』を持って行った。手帖型の日記をなぜ、三冊にしたのかは、当時の兵隊といえ、戦争に行くことであり、敵と戦うことだった。もし死なずに三年もたてば内地か、たとえ外地でも都市に駐屯するだろうと漠然と考えてのことだった。

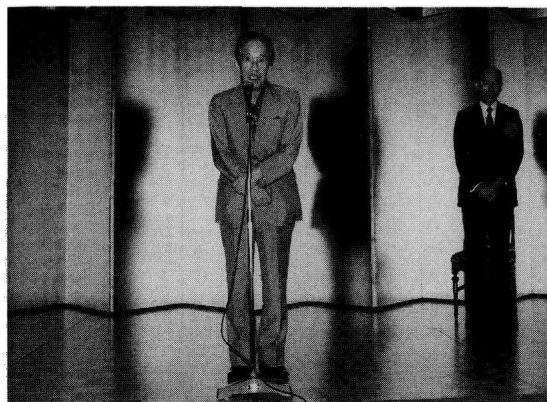
昭和二十年八月九日、ソ連軍は中国の旧満州の国境全域に、戦車を先頭に進入してきた。私は満州西部のノモンハン事件のあった、少し南の国境で警備と陣地構築をしていた。歩兵全員が自動小銃を持っているソ連軍と、銃を持っていない歩兵、竹の水筒をさげている兵隊もいる日本軍の装備では戦争にならなかった。それでも大きな戦闘は二度あった。このようななかでも戦中閑ありで、蛸壺のなかで月明りのもと短歌を作り、日記をつけたりもした。

八月二十九日に敗戦を知らされ捕虜となった。それからはお定まりのコースで、シベリア抑留、それも三年余であった。シベリア生活でも日記はつづけた。手帖がなくなったので親切なソ連の軍医にお願いして紙をもらった。それは皮肉にも関東軍の便箋であった。それをポケットに入るように小さく切って表紙も作り手帖にした。

昭和二十三年十一月。シベリア地区の日本人捕虜はほとんど日本へ帰っていた。私たち集団もやつと故国へ帰る日がきた。私のポケット日記は七冊になっていた。

戦闘で生き残り、シベリアで死を逃れられた、私の分身ともいえる七冊の日記は、日本への乗船地ナホトカの荷物検査で没収されてしまった。その夜は泣くに泣けない気持のなかで、涙がとまらなかった。母の顔が現われては消え、現われては消えた。

古い手帖のごくごく最少限の記述は、この時の無念さから、帰国後はぶつとりと、短歌をやめ、日記をやめてしまった、私自身の心の葛藤の後遺症のようなものであった。



世話人代表として挨拶する井上靖氏と著者（右）
（昭58，東京会館）

丹羽さんとは文壇のパーティなどでは、よく会っていたが、正式に訪問したのは、昭和三十七年の七月十二日軽井沢の別荘だった。

井上さんへは昭和三十二年二月十四日に、当時のお宅大井滝王寺町に行っている。

松本さんとは昭和二十八年から手紙であった。松本さんは九州小倉に在住だったので、初めて会ったのは翌年の六月三日である。

杉山君の連絡でローズルームに入った。入口のあたりは身動きができず、人が重なっているように見える。みんな知っている人である。「落着け、落着け」心が叫んでいる。半村さんが壇上横の、司会のマイク台に向っていったマイクを持った。よく透る声は広い部屋を一瞬にして静寂にした。私は三段の梯子を登って壇上の一隅に立った。割れるような拍手、万雷の拍手とはこのことか、緊張のまま眼をすこしずつ移してゆくと、広い会場のなかの視線は、一斉に私に向けられていることが、痛いようによくわかった。いよいよセレモニーの開始である。半村さんに紹介された井上靖さんが、世話人代表として壇上の中央のマイクの前に立った。

井上さんはいつものように咳ばらいを一度、二度して、これもいつものように手をまえにくみ、丁寧に親切な言葉づかいで話した。

昭和二十四年から私の編集者生活、それも作家と編集者というものについて話し、最後のほうは、「この会は三木君を慰労する会であり、励ます会であり、そして三木君に感謝する会です」ともいった。編集者冥利につきる。心の引緊まるなかで、胸にこみあげてくる熱く重いものは、私の思考力を失わせ頭が空になっていった。

山本健吉さんの挨拶と乾杯。現在、講談社から『山本健吉全集』全十六巻別巻一が刊行中であり、昨年春に完結した『カラー図説・日本大歳時記』全五巻は、監修を水原秋櫻子、加藤楸邨、山本健吉の三氏にお願いした。AB判で平均頁数三百八十頁という、嘗てなかった彫大なカラー版の歳時記であった。この企画では別に編集委員を飯田龍太さんなど、第一人者をお願いして、その委員長には山本さんになってもらった。そのうえ、収容原稿の約五分の一の千枚を執筆願った。

編集現場では、山本さんの執筆の遅れに泣かされた。途中、入院というアクシデントもあったが、時たま伺っては執筆の督促をした。そのたびに、山羊のような優しい眼差しと、本来病弱のうえ、細い声の山本さんなりのスケジュールの説明をきいていると、出版部長を同道していることなど忘れて、もう督促という意気込んだものはしぼんでしまう。山本さんの挨拶は『日本大歳時記』にもふれ、苦労を分かち合ったという感懷になった。

いま、私の腕にしている時計は、この会に集まった方々の会費のなかから、記念としていただいたもので、吉川英治氏の未亡人吉川文子さんから代表として手渡されたものである。裏には愛情こもった記念の文字が刻まれている。

司会の半村さんが「それではこれから三木さんのご挨拶……」ということになった。乾杯のあと記念品や電報披露、花束贈呈。それにビール、ウイスキーを数社から贈られたのには、まったく考えていなかったことで驚くと同時に、大企業のなかのある人の顔を思い、その暖かい心に、嬉しさがこみ